

歴史をふり返る八十年の出来事

熊本県 霍 本 祐 一

私の生れは熊本県下益城郡東砥用村大字甲佐平一三五三―一番地、大正十五（一九二六）年十一月二十三日生。

東砥用村立豊富尋常小学校 昭和八（一九三三）年四月八日入学、昭和十四年三月三十日 同校卒業。昭和十四年四月八日村立高等科入学。昭和十七年四月三十日 高等科三年卒業。

人手不足で農業の手伝い。昭和十七年五月中旬、長兄現役徴兵から満期除隊。兄貴の勧めでもあり途中から進学を希望（個人入学）、昭和十七年六月一日熊本市鎮西高等簿記学校入学。昭和十八年三月二十五日全課程修了団体と同じ卒業。同年四月十日付けで、長崎県飽ノ浦三菱重工長崎造船所入社。戦いは厳しさを増すばかり。入社当時、アメリカの捕虜が造船現場へと列を作り日本軍陸戦隊

の警備のなか、数百人もの四列縦隊で通り過ぎる光景を毎朝見ました。当時の日本は前進前進、中国から南方へ朝日の昇る勢いでした。戦況は日増しに厳しさを増すばかり、その時長兄に召集令状が来る。再入隊、私は入社したばかり、食糧増産の時局でもあり、兄貴の声で、自己退職、実家に帰るが仕事にはならず。兄貴は出征、家には徴用で行先不明の話。その頃、旧砥用町清水・光岸寺住職を団長とした砥用開拓団が結成され、先発隊は昭和十六年から十七年にかけて旧満州国移住が進められて、私も親戚の移住で家族として渡満を決意。昭和十八年七月十五日祖国日本を出発。

旧満州国錦州省盤山県大窪砥用開拓団に十八日到着し、一カ月くらい過ぎた頃、満州拓植公社盤山出張所入社。

仕事は開拓団の居食身の回り品その他。

入植は私達の管轄においては義勇隊と団を含め、北は北海道、南は九州、二十個団からの入植でした。一見見渡す限り地平線の大草原、見る限りに

は国の膨大さを感じさせられる。過ちではあった

けど、国の政策は大陸に相応しい大事業。食糧基地として衣食住、道路用排水路等の整備、多目的生産、環境整備され、事業費の投資については一般民には想像を絶する思い。現在は中国国民十三億の人達の生活に必要な食糧基地として果たす役割は言葉に現す事はできない。日本国と国民は中国に偉大な文化と歴史を築き残してきたと思う。

それは現地歩認者以外の人には理解できない。今一度元気な時ツアーがあれば参加を希望したいと思っているこの頃です。戦後六十年、前と今を、私は長男の誘いで北京を中心には五回ほど家族旅行致しました。年と共に中国は発展の道を歩いています。

（私の家族構成は）

家業は農業、父母共七十七歳で他界。

私は男子五人兄弟の三男、姉妹四人、計九人。

現在姉三女健在。長兄、二兄は戦死。弟二人は健在。

現在の家族は、私 祐一、妻 マリ子 七十六歳。

子供は、長男、二男、長女、二女 結婚

長男は農業の手伝い方、市内会社勤務（通勤）。

二男はすべて農業に従事、私と妻も何とか年は老いましたが今のところ元気で農作業を手伝い、張りを出しているところです、お蔭様にて。

ソ連軍侵攻前

昭和二十年二月二十日繰上げ徴兵検査通告を受け、検査は錦州省盤山県県庁内の一施設で行われ、私は第一乙種合格、大変名誉あることに感動しました。

昭和二十年四月一日付けで、旧満州国吉林省吉林五〇二部隊、機動二連隊一中隊一班、装備は一般歩兵装備に携帯用スコップ、小銃一丁、実弾少々、軍服新。中隊長、中尉一人、副中隊長、少尉一人、各班には班長軍曹二人、班付副班長、伍長二人、各班に四人の班長で構成され、古年兵は零。

私達同期兵は体験豊富な指導者により、しかも

短期間で第一戦で対応のできる厳しい訓練を受け、国を守る天使としての使命を果たすことのできる心理的軍の教育をたたき込まれ、死の恐怖感を伴わない特別の教育を来る日も来る日も受けました。今で言うなら「自爆テロ」。肉攻用爆薬と共に敵戦車隊に突込の訓練が一カ月間、実弾訓練二カ月間、最終的に三カ月で一期の検閲を受け、二等兵から一等兵に特進と言うか、期間中と日常の訓練、個人的行動と実行性等すべてが整った者が満期を迎える（除隊）までの成績に影響する。結果として良し悪しに結びつくと言う厳しい軍の教育のありかたです。実体験し、良面もあり、一方なんとも言いがたい点もあります。立派な教育を受け、新兵は死に恐れる事なく七月五日、ソ満国境守備隊として第一戦陣地豊昌駅到着。駅から一キロ山中に入り陣地構築。山を掘り抜き、中央一メートル通路両面二段寝室、一カ月ぐらいかけ宿营地完成。偽装も整えすべてが終わり。八月九日、本隊へ伝令員として、上官より突然の命令、私の外三人、

本隊のいる金創へ出発。すでにソ連軍は東寧旧満州国境に突入していました。出発して十分頃に上空より機銃掃射を受け、何とか無事本隊に着いた時はすでに本隊はソ連侵攻の情報を察知したか田口少佐外数十人だけ、本隊は渡間という所で一戦を交える準備との計画だとさく。

ソ連軍侵攻

侵攻は昭和二十年八月九日、旧ソ満国境東寧関東軍守備陣地を突破、戦車隊と前後して搜索隊が手に自動小銃を持ち日本軍の抵抗ないまま戦車の上にもまたがり、旧満州国政府統治機関を目指し突進していく。所によつては一戦を交えた部隊もあったようで、そのような部隊はシベリア抑留中から到着後も一年間は致命的待遇を受け、道中で倒れ、また到着後の待遇等での差別がひどく、入院しても回復する事なく祖国を夢見て去って行った戦友が数多く、ただ涙ぐむばかりでした。戦争の悲惨さと負けは、また言葉に出せないものがしみ出ます。

部隊の配置等はできていたようにも思われる。

侵攻への対応編成も準備は出来ていたようで、私達新兵は情報について何も知る事無く、いよいよ決戦への覚悟は当然であった。ソ連軍が進攻して去った後を見回ると逃げ遅れの見習士官が自動小銃で撃たれているのを見、抵抗もない兵を銃殺して去る。私達新兵には上官より弾を出すな命令が出て、先の方では激戦とは思えぬぐらいの争いはあったが、三十分ぐらいで敵は去る。時間をおいてソ連軍は編成を作つて数回にわたり戦車隊と搜索隊は戦勝目前の行動を日本兵に見せつけ、堂々と侵攻していった。私達は少数兵力では何もできず、連志溝という地点に集結したが、軍の力減少で対応できる武器も不足している事でした。ソ連軍は関東軍の兵力減少情報を知つての侵攻であった事を後で知る。

八月十三日連志溝出発、本隊を求め一昼夜歩く。やつと本隊に着いた十四日夕方、夕食をとり目的も知ることなく一夜を明かすことになる。十五日

朝食を済ませ命令待ち。

終戦

八月十五日大隊は待機、昼食をとり、隊員は休みを取つていたら、本隊より通信にて天皇自らの言葉で終戦の報道があったと隊長より全隊員に知らされた。

でも皆混乱もなく、軍旗のもと何を行動に変ずる者はない。それは軍の力が減少している事しか思われなかった。

隊員は全員、上官の指揮のもと全員同一行動をとることに決定。

終戦によりソ連軍指令部に特使として黒田、佐々木両曹長が隊の特使になり、交渉の末八月二十五日、関東省渡間にて武装解除受けることとなる。身の回り品の外は皆没収。

私達の大隊は全員解放する事なく全隊員行動一致に決定。それが結果として良かったと自分は今でも思っています。

軍が解放しなかった事が現地人とのいさかいも

なく、被害を受ける事もなく、身の安全、お互いの協力関係もできたかと思う。皆が動揺する事なく、被害を受ける事もなかった。

シベリア抑留地への旅

集結地関東まで武装解除地から三日間徒歩。先発隊と合流地関東集結では、日本に帰る、ウラジオストック経由とか、情報が毎日どこからともなく噂話が広がった。何と言っても食糧の補給が第一。新の軍靴、靴下、米、麦、大豆等を背囊に詰込み、身の回り品の取りそろえ、体力作りに余念がない。日が過ぎるにつれ、日本に帰れる、ソ連行との噂で二つの道が出た。

そして九月二十八日、集結地関東を出発。私達の隊は三四大隊、夜になるまで行軍野宿。道中好天に恵まれ雨にあう事なく長い期間全隊員一カ月余り徒歩でウラジオストックの手前、クラスキ地に十月二十五日夕方到着。長い旅で疲れをとるため二週間ぐらいの体力作り。ソ連行と祖国行き希望と悲観的見方、ここまで来たからには我が身を

大切に護ることに専念する。

頼る者は戦友だけ、それに携帯用の食糧、道中現地人のトウモロコシ畑が延々と続く所で自己の食糧の補助食としてもぎ取る戦友が多かった。警備兵は厳しいことはなかった。

十一月十日朝から出発準備、日本かそれともソ連での労働かとつぶやく。乗客列車ではなく貨車、それも本当にお粗末。積み込まれ一昼夜過ぎ少し日が板の隙間から点々と見える。何か方向が違う、北の方向に進んでいる。噂ではソ連は石けんの材料とかの話も聞いたことがある。色々と話題は多く、そのうち昼近くなったところで駅に止まる。着いたところはハバロフスク市街の駅。三四大隊全員約八百人、私は何が原因か不明で翌日より高熱の四〇度の病に侵され、一時入室したが解熱なく、一週間目ハバロフスク市内の大きな病院入院。一カ月後退院。前の隊と違い、国営農場跡地。ハバロフスクより二時間ほど車で走ったところ、これは現地人の刑務所跡地。大森大隊八百人ぐら

いか、私は退院後当收容所には練成隊が編成されていて練成隊で一カ月間体力作りをすることになる。

抑留地への旅

軽労働の仕事につく。一カ月間の健康管理をされ、運良く大隊の食糧と被服係の仕事を申し付けられた。それには深いわけがあつて、当時までは現地人ソ連の元少尉で、独ソ戦で戦勝祝のウオッカを飲みすぎ、上官中尉との口論となり拳銃で上官を射殺して十五年の罪を受け、日本人の世話をしていました。食糧、被服等（カラプチ）横流しが判明、交替で私に指名がきたわけ。

その少尉はワリコフ・ニコライフという人物で、寢室を共にし、二人で八百人の日本人衣食を担当し、戦友の健康管理に務めることとなり、色んな面での勉強もすることができ、十日ほどで私は一人でニコライフの後を引き継ぎ、毎日朝は三時半から三〇〇グラムのパンを八百個切りテーブルに並べ、炊事係がスूप缶に四〇〇〜五〇〇cc位入

れ、朝のメニューですね。食前にはドクトルの検査を申し出て「ハラッショ」許可を受け、食事準備完了。昼食持参者は前日申し出て、出発時に炊事係より直接手渡す仕組み。隊の運転士さんは、熊本県上益城郡乙女田口出身の方で、大隊長の運転士、木村清さんで、食糧品受領の際はソ連事務所（カントラー）に行き、健康体の人数と軽労働者数と入室者数を記名、カントラー係に提出、それにより伝票切り、ハバロフスク食糧管理局から受領する（含む黒パン）。

兵舎での生活は当初は南京虫、シラミ等ありました。私達の收容所では熱風高温消毒が兵舎と入浴時も実施し、衛生面においては他の收容所は知りませんが環境管理は良かったかと思われま

す。普段は八百人ですが、収穫の時期を迎えるとカルトシカ（ジャガイモ）ですが、千〜千二百人が増員され一カ月間ぐら続きます。作業名は大中小（形）の選別で、大はゲーネナル、マイヨール（大将、中将）、要するに優秀品は国の代表的な人

物に納める独裁国家である事を知る。

労役

私の収容所は国営農場で、作付品目は、九〇パーセントはカルトシカで、その他ナス、カボチャは日本人が作付収穫可能に開発。トマトは前からの作付け品目みたいです。

労役は、労働時間は作業種目により多少は変わりますが普通八時間で、その中にノルマ制があつて、ノルマを達成した隊は時間内でも帰るし、また食事の方で優遇され増食（二食分増える）です。体力のある人は伐採作業に就いていたようで、その他の人は体力に合わせた編成で、農場関係者は農産物を持ち帰り、自己の健康の維持管理に努めていたようで、二年目からは当収容所においては病弱者はほとんど出ませんでした。医務室入室者も七、八人ぐらい。

ノルマを強制する事はありませんでした。ただ作業種目で期限がある種目についてはダワイ、ブイステリーの声が出る時も多少はありました。私

抑留者の統制管理

第一番に入所者の健康チェック、労役に携わる隊員と少し弱めの人と区別チェック。体強者は山林、工場、農場の区別で編成。弱者は農場でも軽労、カルトシカの選別と、選別にも種類が多くあります。現場の監督の指示により作業は進められます。また日本人幹部の指導等隊員との縦横の連係感がよくとれて、二年目に入ってから仕事も楽に行われ、ソ連兵も安心感を持つようになって来ました。

特別の基準、免除とかは私共の所内にはありませんでした。出入りがあつても健康チェック第一、それから本人の希望と申しますか体調に相応した作業種、それも隊の幹部の方たちが本人の意志と体調を充分認めた上で配置をされていたようで、必ず無理のない勤務化です。

健康チェックの上、作業に無理と判断された方は、入室か体力作り練成隊での軽作業に回される。前の項目と同じで、体調の悪い人は隊担当の軍

は外の作業にあまり体験がなく、作業から帰った戦友の話を聞き、当収容所は案外恵まれた所に来たかなーとの感じが本音でした。

ただ寒さだけは内外共に厳しく、日本の気候とはまったく違います。

当初は環境と作業種に無い経験と言葉のせいで戸惑いを感じ、「ダワイ」「ブイステリ」の声で直立する場面もあつたようで、一年過ぎ、二年目に入ると仕事も順序よくでき、言葉も理解でき、ソ連人との通じ合う点が多くなってきた頃、関東軍総司令官陸軍大将山田乙三様と畑俊六様、旧満州国皇帝外二人の方々が週に一回私どもの収容所に入浴に現れ、山田大将より「体を大切にしなさい、近いうちに帰る日が来ますから」との言葉を聞き元気づけられました。

昭和二十二年六月と七月の時は、日本への帰還は年末にはと言葉少なに申され、隊員いよいよとの安心感を体全体に受け止め、なお隊員は体力作りに務める日々であつた、さあダモイだ……。

医がいて診断を受け、入室と指示があればそれを実行するし、軽労と指示あれば練成隊。健康管理については二十一年中期頃より私どもの収容所においては実施されるようになった。

全員が祖国日本に帰るには団結であり協力しあう事で隊の指揮統一がなされ、毎日、点呼、朝食、作業場編成、現場班長と監視兵、現場においては監督との調和もとれ、私が移転隊として二十二年十一月まで順調で何の混乱もなく過すことができました。やはり日本人は規律正しい教育を守ることとで現地人との信頼も厚くなるのではと思いました。

衣類等については終戦集結時食糧と衣服をとりまとめていたので着替えのシャツ等は多少確保していました。二年目から全部日本製軍服シャツと古いものは取替え与え、厳寒期になれば防寒服と防寒外套とを支給、皆食糧と被服類は日本軍兵士を労働化させる計画的な進攻であつたと思われる。食事類。私は食糧と被服係担当で、毎日患者に

は特別食の伝票をもらい、入室者何人、その外の方は健康隊者も練成隊者の方も同一食糧で伝票をもらい、ハバロフスク糧秣庫に……。

米は少々、患者とノルマー〇〇パーセントの方。あとは燕麦、メシはやわいのが日本の碗一・五杯ぐらい。朝食はスープ四〇〇〜五〇〇㍻ぐらい、黒パン三〇〇グラム。スープには魚とエンバクのドロドロのもの、メシの場合は日本食のお粥より少し固めで日本碗一・五杯ぐらい。不足は現場より自己の処理できるぐらい持ち込むようで、毎日ではなく体調との相談から。

休日はありました。作業種により期限切れの作業の場合は休日でも半日出勤という方もありました。それも週に一回ぐらいでした。休日はゆっくり休むのが仕事で、二十二年後半頃から碁、将棋等も少しずつ動き出したようです。

収容施設は木造平屋二段、中心一・五メートル通路、両側寝台。電光はあまり強くない。暖は薪で不十分のときもある。入所当時は大変でした。

少しずつ環境にも慣れ、管理状態も改善され過ぎやすくなってきました。

洗脳教育は私どもの収容所では、運動というか、田舎の方で話は耳にした事はありませんでしたが、私の民主化の運動の掛声は頻繁に聞きました。規律正しい中にも娯楽、歌とかは流行と申すか少しは流れるようで、県人会を発足させるとかいろんな趣向を考える余暇も出てきました。

収容所全般的な内容については、入所当時は厳しい環境での生活であつたけれど、一年を過ごす土地勘と気候、原住民、監督、監視兵等との内容も理解できるようになり、想像より早く気分的に私どもの隊員は明るく、毎日の作業に計画的な方が多く、当収容所はハラシヨ・ラボータの隊と信用性もあり、早く帰れる気運も出ました。

右記の通り犯罪者も出ず、懲罰を受ける者も出ず、優秀の隊とほめられ、労働はされたが静かで統一されて良かったと今も思われます。ナホトカ

に着いて乗船するまで、また帰省まで、人との接点が良いあつた隊、他の隊では色々問題が出ていたようで、民主化運動を呼び、幹部と一般兵士とのみ合いも出てました。軍刀を引き出し大声で

呼ぶ者もいました。内容は未知？

抑留中の生活と極限状態における意識

終戦と同時に集結地までは食糧の確保は皆持つていました。しかし衣類については別に準備はできぬ、これから先の事が気にかかり、集結して部隊の食糧倉庫を第一に持てるだけの量を確保し、戦友と共に次は衣類を少々確保し命令を待つばかり。関東軍の食糧保存については私どもの予想を超える食糧が各部隊に保管管理されていたと思われる。終戦と同時に、ソ連軍は十輪トラックを日夜を通して関東軍倉庫より自国ソ連へ搬送、終戦年十一月までも搬送は続いた。そのような状況で私なども一カ月ぐらいの食糧確保に努め、指導部の上下との連帯が良くとれていて、いっどこでも健康については自己管理、目的は祖国日本に帰るこ

とであると胆に銘じ一日一日を大切に無事である日を誓う。

生死の境は関東集結地から一カ月ほど、徒歩で野宿と猛行軍により最終的には日本に帰ると信じていたが逆さまで、希望が抹殺され苛酷な生活を意識するより外なかった。ここで私はややもすると樂觀的気分陥る。四〇度の高熱で一週間熱は下がらず、ハバロフスク大病院に入院、そして二日目部屋清掃に日本人が来て何か不自由なものでもあつたらと、声をかけられる。よく見ると彼は徴兵検査のとき同期人で、鹿児島県指宿市まで覚えていますが坂本稔君でした。持つべきは友である、生きる道が大きく開いた。一カ月後退院することができ、心よりお礼を申し、早く帰ったら故里へ連絡する約束をする。坂本君は病院での清掃ラボータを続けていた優秀なヤポンスキ・ハラシヨ・ラボーターとして人気者だった。

彼のおかげで私は本当に元氣を取り戻し、労務に復帰することができた。

私は二十二年十一月末、隊の第一号で帰国し早速手紙を差し出しましたけれど、手紙も返って来ず、また返事もなく、家族の方が誰かの手に渡ったとは思っただけで今日になった。

昭和三十年頃指宿市に行く機会があったので、地番が記憶なく大分探したけど再会はできず、残念の思い心に残る今日この頃、今も忘れることはありません。

苛酷な抑留生活の中で私は第一自己管理(年々)。抑留生活の中で物事を深く考えず割り切って、今は他人にお世話になってるんだという考え方で気分が楽になる環境を自分なりに作ってきたと思います。真つ直ぐな道を走る。

収容所と大隊中隊現場によって異なりますから私どもの隊は隊長が大変良い人、またその側近者の方も指導者としての知識が万能な方で、前大隊も大変良い方ばかりでした。多少の苦労はお互いに取り入れ、次々と夕方までに完了。十四日まで色々と調査があり、十五日早朝、朝食後それぞれの故郷へと別れて行く。

像すらできない。船名は日本船「信濃丸」。

信濃丸にて昭和二十二年十一月九日午前十時頃かと思ひます、舞鶴港入港。昼過ぎ上陸。日本上陸と共に流れ作業式で健康診断すべてを、中食を取り入れ、次々と夕方までに完了。十四日まで色々と調査があり、十五日早朝、朝食後それぞれの故郷へと別れて行く。

帰国後の生活

戦後三年近くの空白と申しますとその通りです。しかし私は軍の職に就いていたような心理で、多少は環境等が地形的に異なっており、軍の生活の中で一期間の厳しい教育を受けたのです。実質私の家は農業を主で経営していました。三年近くの時間で農家の経営状況は思ったより復興の道が進んでいる様子を見る感じでした。

食糧については心配する事はありませんでした。熊本駅で降り、市電に乗り南熊本駅前で降り、当時現役で熊延鉄道が運行され甲佐駅で降り、私の前は県道二二〇号線が走り、その県道を個人の

祖と両親に感謝の気持ちで働ける事に喜びを持って過ごしています。

帰還

ハバロフスク国営農場第三収容所

帰還列車ハバロフスク発、昭和二十二年十月二十日

集結地ナホトカまで停泊することなく順調に行き、列車内での動揺もなく静かな帰還への第一日でした。昭和二十二年十一月一日ナホトカ到着。

帰還船乗船まで一週間の時間があり、出国準備に時間がかかった。隊内での混乱もなく乗船を待つのみでした。

いよいよ乗船に当たり健康状態、人員の数合わせ終了後、十一月七日乗船、順調円滑に進んだ。

船内では通常と変わりなく、特に動静で隊員はただ帰る喜びに抑留期間の心の清算でも、または帰国を果たす事のできなかった戦友の思いに、または長い徒歩での長旅、様々な出来事が頭の中に走り、一昼夜の船宿の中での清算は無理ではと想

坂口バスが地元の方で地域の方々の生活道としての役割を果たして、現在も相変わらず少しずつ改良工事が年次計画として実施されています。

帰ってみますと長兄は終戦一週間前シンガポール・ジョホールバル地で地元敗残兵の突然の襲撃にて戦死。二兄はフィリッピン・ルソン島リンガエン湾にて戦死と聞き、私は、死を決意した者は死に至らず、俺たちは絶対帰って来ると、兄貴達は経験は多く、まさかそのような思いはありませんでしたけれど、南方の激戦の話を聞きました時、自分には言葉も出ませんでした。

帰国後二十二年度の農業の仕事はほとんど済み、冬に入り山林の下草刈り、そして二十三年新年を迎える。数年ぶりの家族との正月気分と言っても、運命につき果てた兄貴達の事を思う時、戦争は二度と繰り返すことのないよう祈らずにはいられませんでした。出征兵として家族と地域の方々の見送りに手を振り喜んで行ったその身なり形ある全

体的姿が今もお心と頭の中に消えることなく厚く焼き付いて今の私達家族を見守っている、そのような気がし毎日を忘れる事はない。

でも二十三年には私の部落の区長を頼まれ引き受け、さらなる地域の復興に頑張り、喜びの日もあり、悲しみの日も元気で過ごす事の幸せを忘れる事なく、生活上順調で目的を持って悔やむことなく今日に至っております。

シベリア墓参加は本当に良かったです。墓前に着くと戦友が雨を止めてくれました。

多少前後しましたが宜しくお願い申し上げます。

【執筆者の紹介】

出生 大正十五年十一月二十三日

熊本県下益城郡東砥用村に生まれ

最終学校 昭和十八年三月二十五日熊本市鎮西高等簿記専門学校卒業

入隊前 旧満州国錦州省盤山県大窪満州拓植公

入社勤務

入隊 昭和二十年四月一日旧満州吉林省吉林五〇二部隊、機動二連隊入隊

終戦場所 旧満州関東省関東渡間にて

抑留地 ハバロフスク郊外国営農場

復員 昭和二十二年十一月九日舞鶴港上陸

復員後 熊本県にて農業に従事

全抑協砥用支部会員として活動しています。

(熊本県 井上 明)